

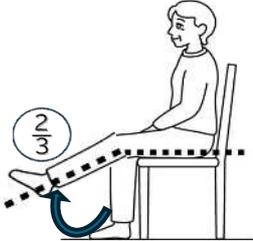
『麻痺・拘縮の特記事項・判定の考え方について』

1-1「麻痺」は『自動』・1-2「拘縮」は『他動』で、規定動作がどの程度挙上できるのかを確認する。
 調査票に自動、他動それぞれ分数(膝を曲げた状態(90度)から水平位置(0度)まで○/○)等で表記する。

【例1】 ‹麻痺あり› ‹拘縮なし›

特記例(抜粋): 左下肢自動2/3で挙上・静止可。
 他動で水平まで挙上可能。

自動 2/3まで挙上し静止可



他動 水平まで挙上可

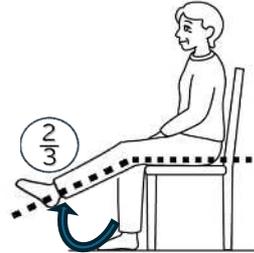


☑ 膝関節が90度曲がらなければ「拘縮あり」になるので注意

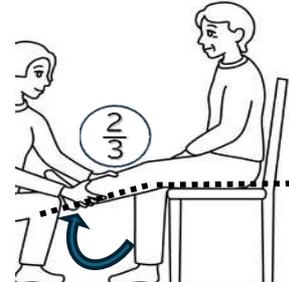
【例2】 ‹麻痺なし› ‹拘縮あり›

特記例(抜粋): 左下肢自動・他動とも2/3挙上・静止可。

自動 2/3まで挙上し静止可



他動 2/3まで挙上可



☑ 自動と他動の挙上範囲が同じ場合「麻痺なし」

【例3】 ‹麻痺あり› ‹拘縮あり›

特記例(抜粋) 左下肢自動1/2挙上・静止可。
 他動で自動よりも挙上できるが、水平までは不可。

自動 1/2まで挙上し静止可



他動 1/2以上挙上可だが水平までは挙上不可



☑ 自動より他動の方が挙上できる場合「麻痺あり」

【例4】 ‹麻痺あり› ‹拘縮あり›

特記例(抜粋): 自他動ともわずかにしか挙上できない。
 著しい可動域制限ありと判断。

自動 わずかに挙上



他動 わずかに挙上



☑ 著しい可動域制限があり、確認動作ができない場合
 「麻痺あり」・「拘縮あり」